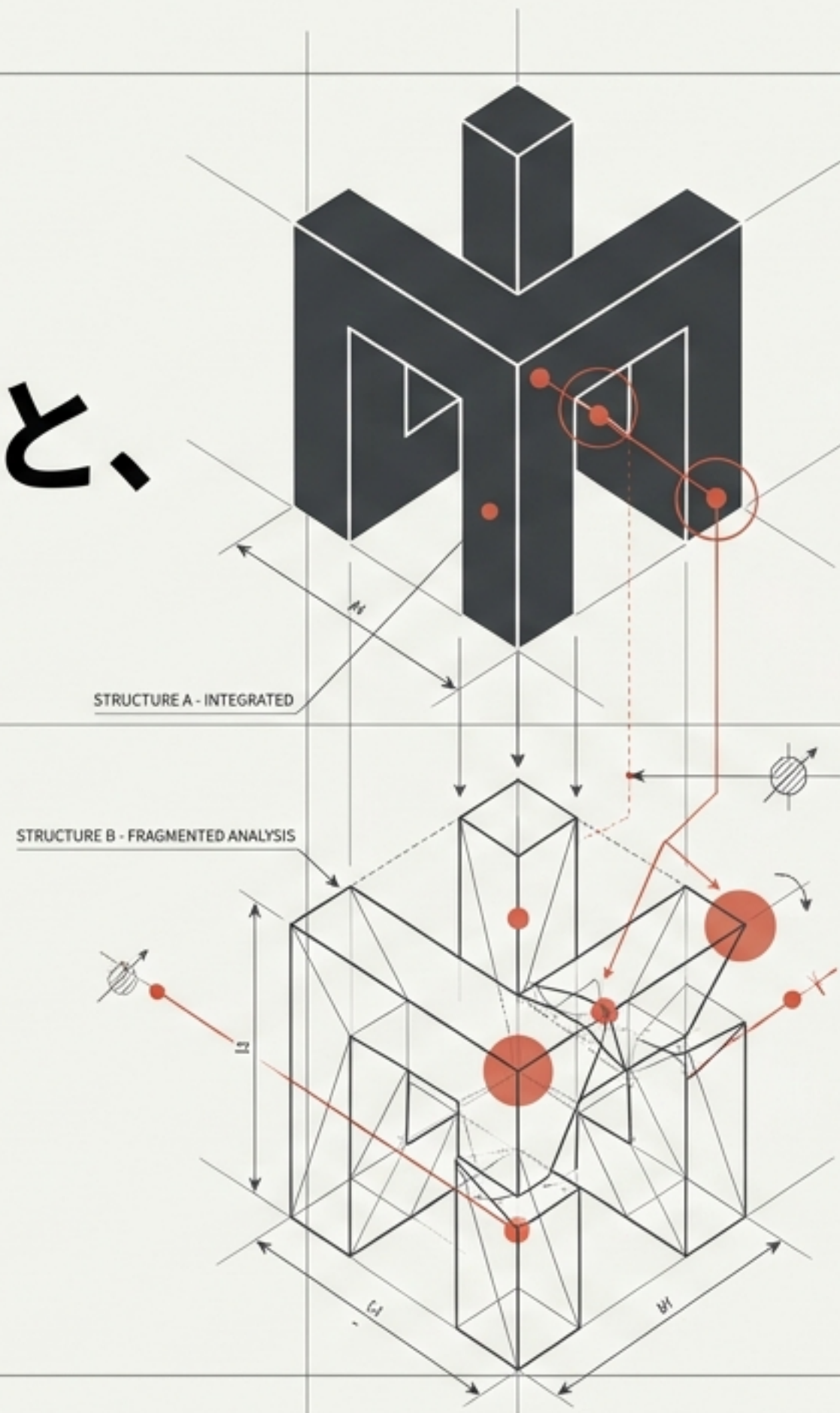


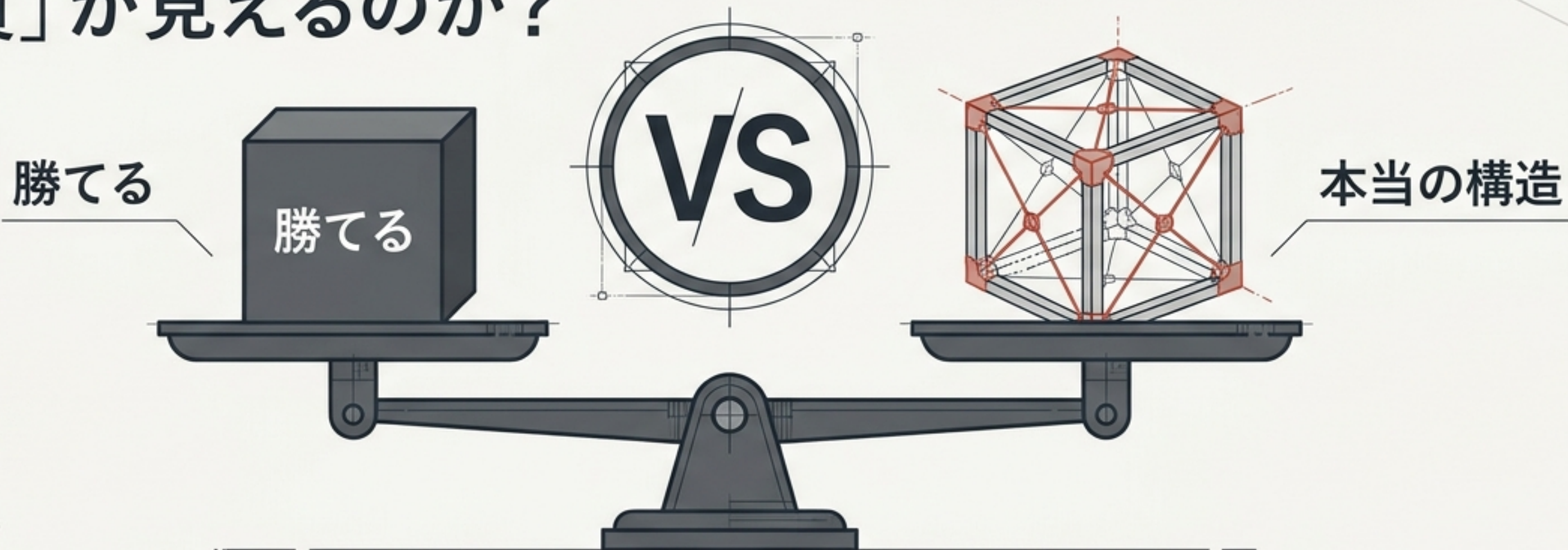
【格言】自分より弱い人と組むと、 バドミントンが見えてくる

己の「設計力」を暴く鏡と、
AIが読み解く真のリーダーシップ論

PHOENIX愛知



なぜ、弱い人と組むと「本質」が見えるのか？



自分より強い人と組んで
勝つのは気持ちが良い。

しかし、それでは
「本当の構造」は
見えてこない。

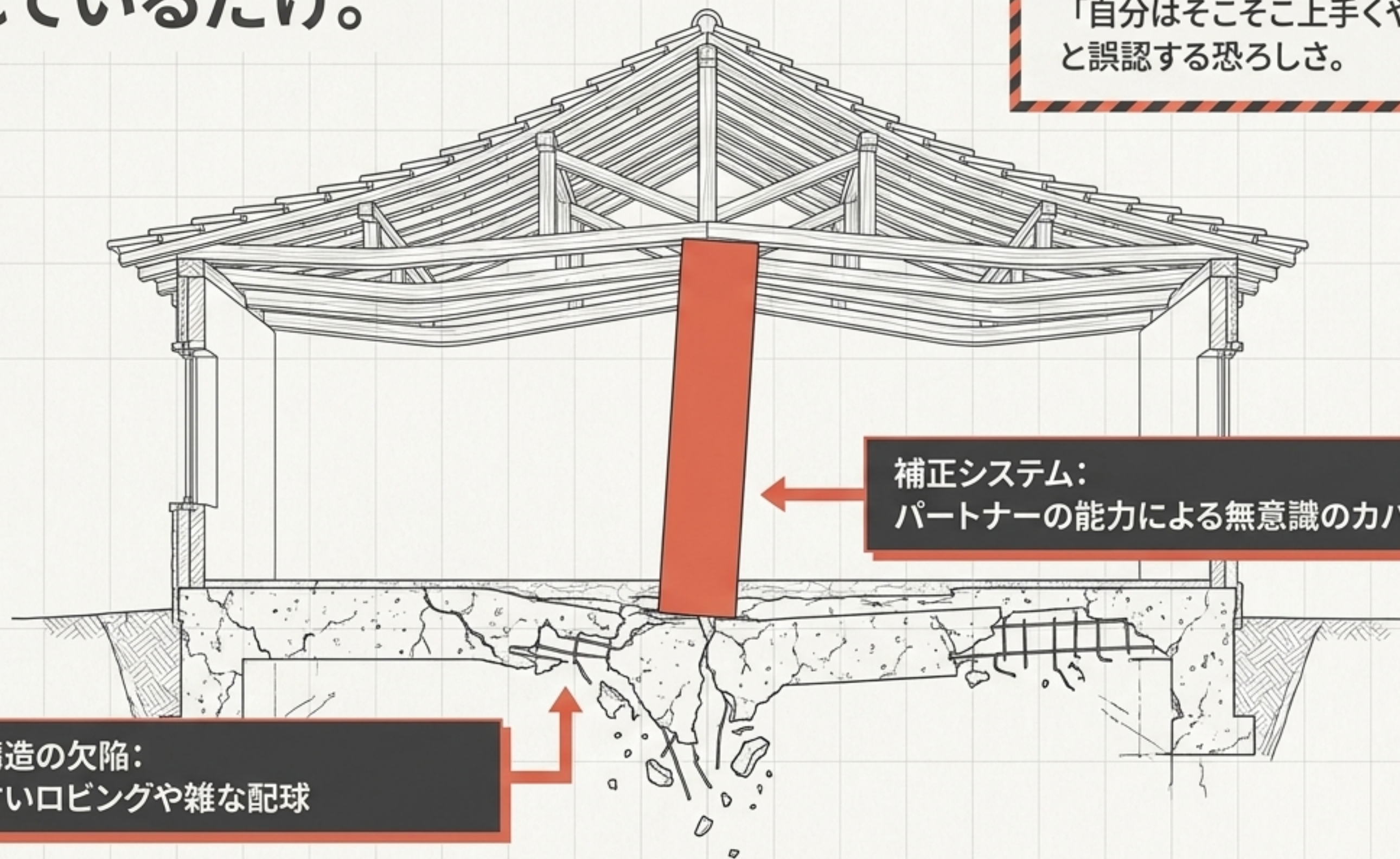
成長の鍵は、思い通りにいかない
「上手くいかない展開」の中にこそ
隠されている。

強いパートナーがもたらす「心地よい罨」

	[強い人と組む時]	[弱い人と組む時]
表面的な結果	ミスが減り、勝てる	ミスが増え、ラリーが崩れる
隠された実態	自分の判断ミスを「無意識に消去・回収」されている	自分の「雑な配球」がダイレクトに結果に反映される
現在地	実力以上の結果が出る「介護」されている錯覚	己の実力と未熟さが「鏡」として暴かれる状態

あなたのミスは、
消されているだけ。

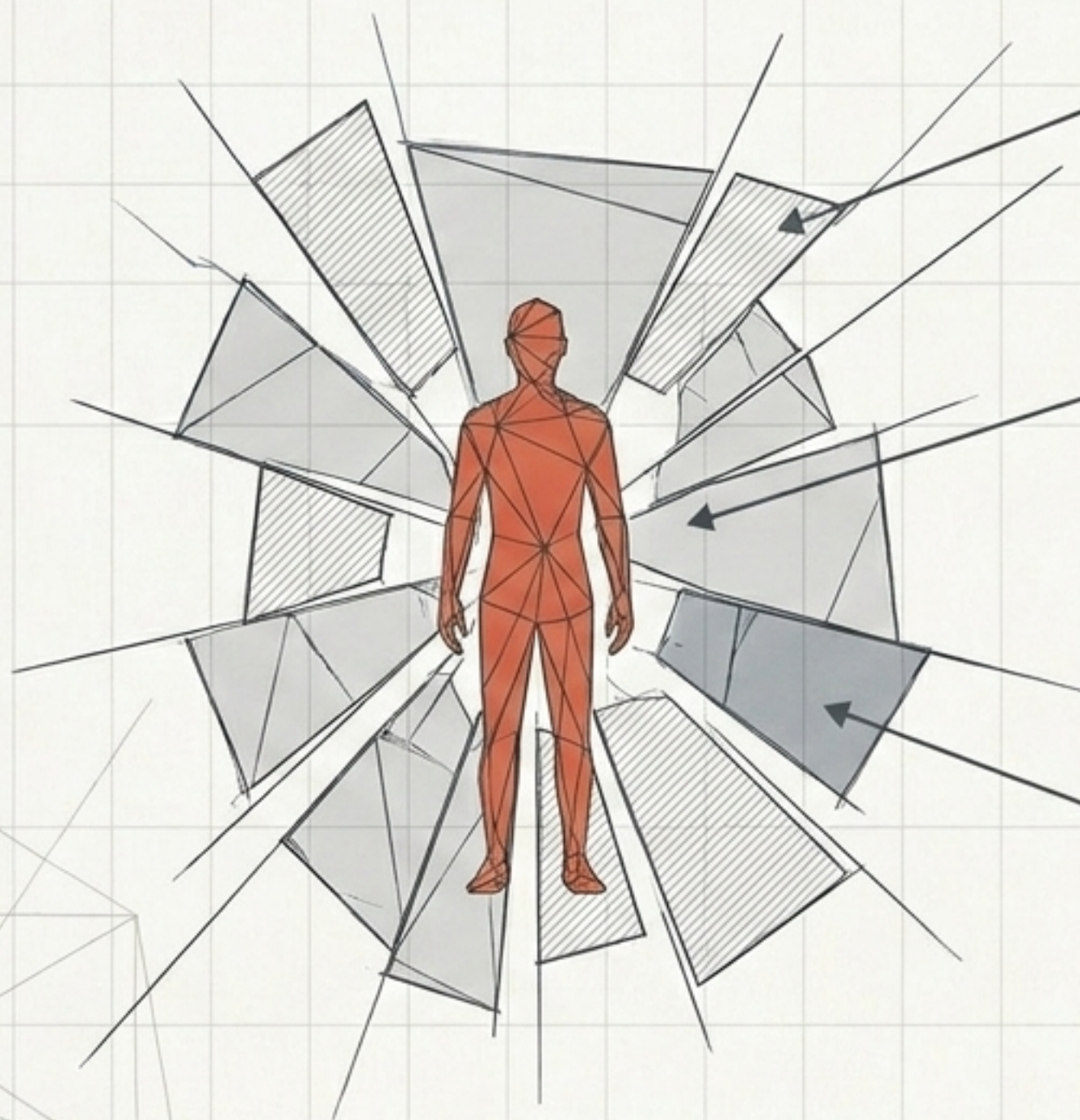
危険な錯覚：
本来なら失点している展開に気づかず
「自分はそこそこ上手くやれている」
と誤認する恐ろしさ。



補正システム：
パートナーの能力による無意識のカバー

構造の欠陥：
甘いロビングや雑な配球

弱い相方が教えてくれる、 己の「雑さ」

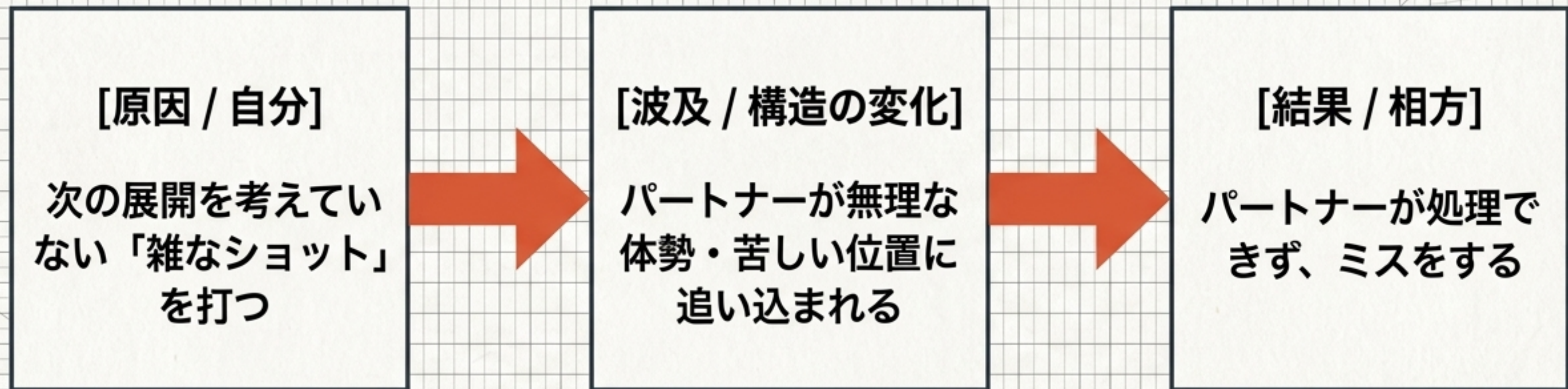


弱いパートナーと組むと、
途端にミスが増える。

ここで「なんでミスするの？」と
他責にするのは、視座が浅い証拠。

直視すべき真実：
浮き彫りになっているのは
相手の未熟さではない。
あなた自身の「配球の雑さ」と
「判断の粗さ」である。

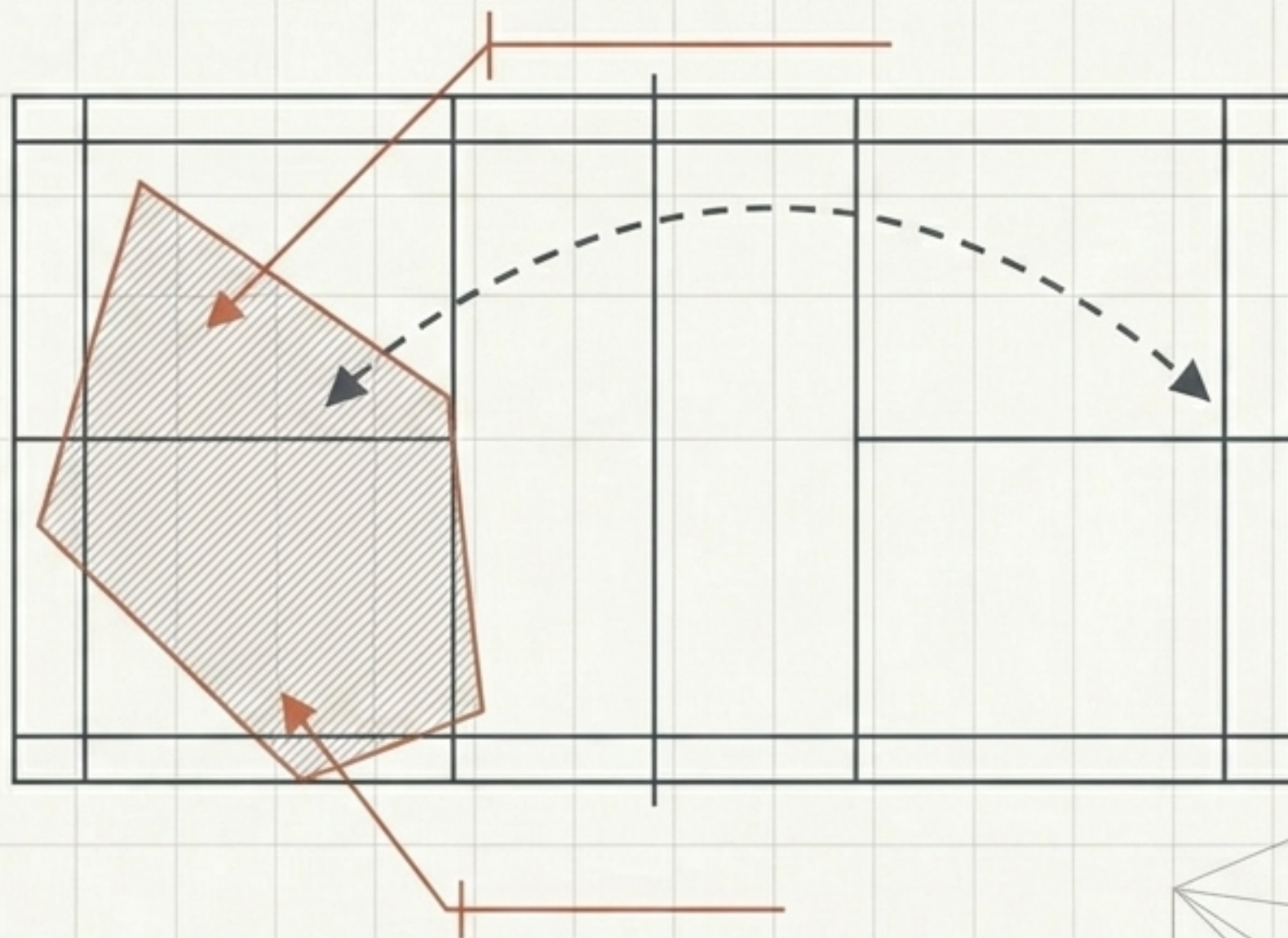
ミスを「因果関係」で読み解く



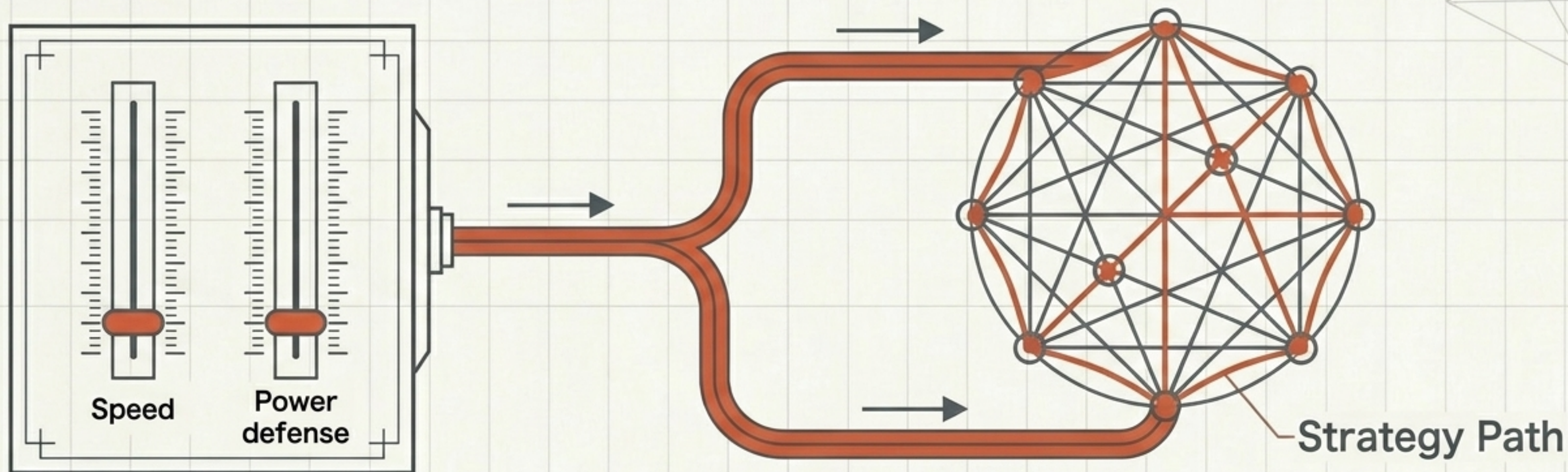
「自分なら取れる」はペアの正解ではない。
パートナーが処理できない因果を、自分が先に作っていないか？

ダブルスの本質は「次の展開を設計する力」

- ショット単体ではなく、「そのショットが次に何を生むか」という波及効果を見る。
- 自分が気持ちよく攻めても、次球でパートナーが苦しむなら、それはただの「自己満足の攻撃」。
- 真のダブルス：ペア全体が壊れない状態で相手を追い込む「設計」を学ぶこと。



今ある能力で勝つ 「再設計」の知恵



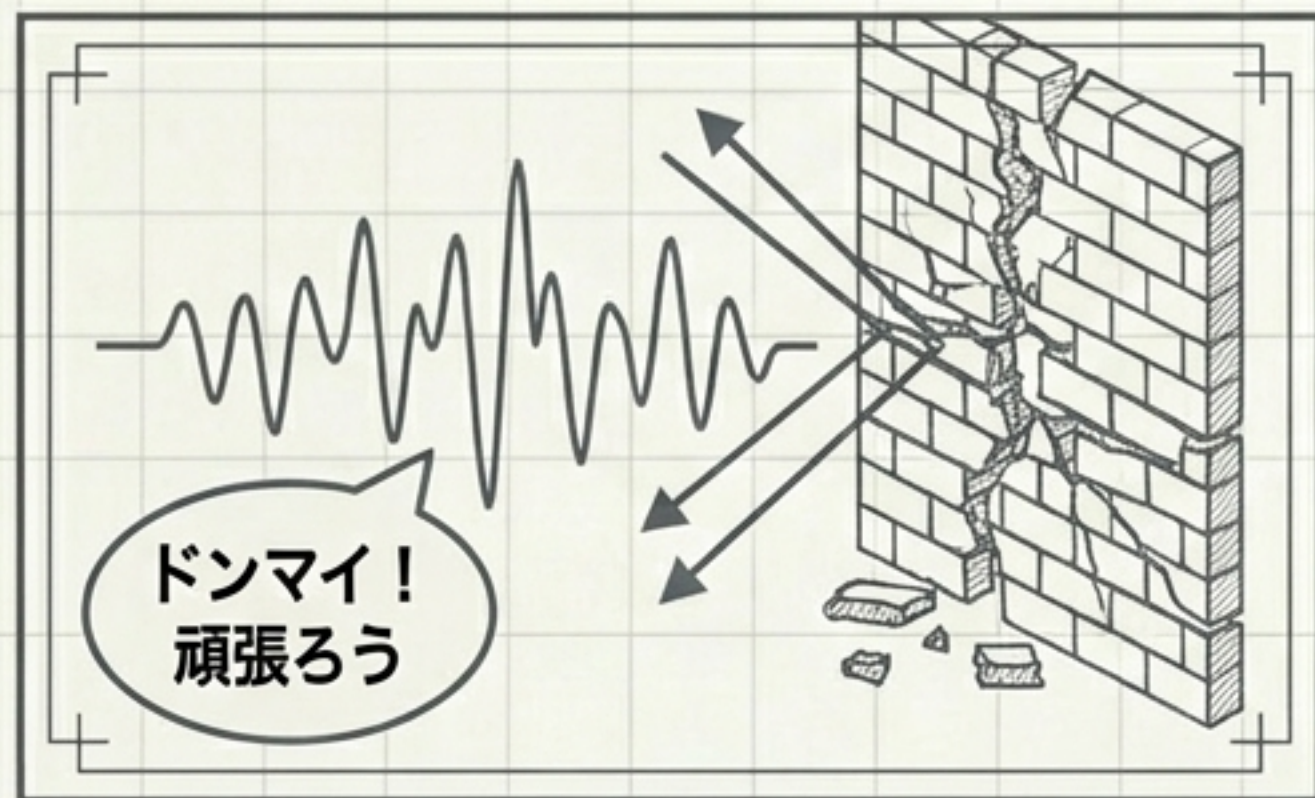
原則：弱い人と組むことは「我慢の練習」でも「介護」でもない。

足が遅いなら → 足を使わせない展開を設計する

強打に弱いなら → 相手に強打させない配球を選ぶ

結論：ペアの能力条件を読み解き、今ある能力で成立する構造を作ることこそが本当のダブルス。

声かけは「精神論」ではなく「構造の変更」である

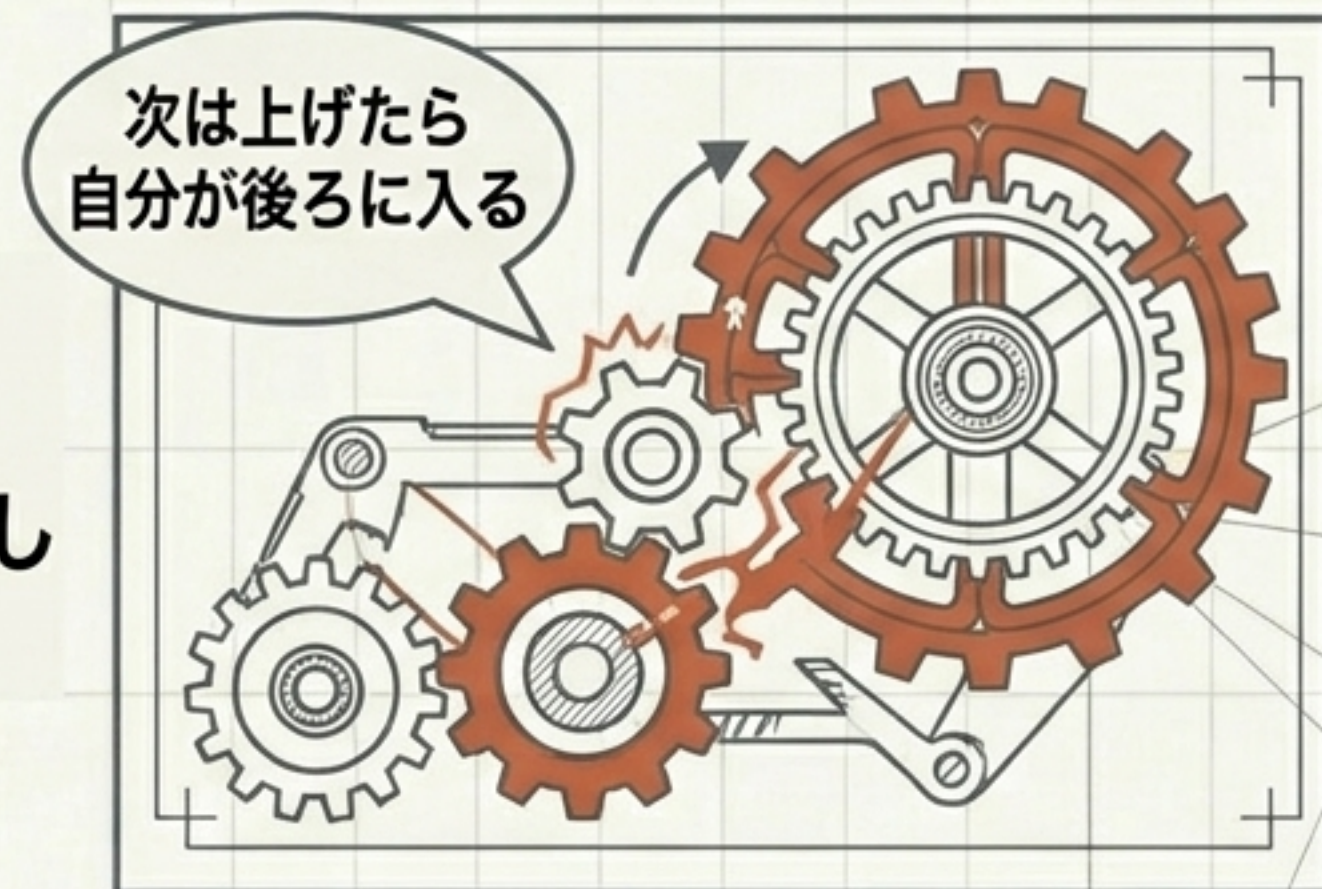


精神的な励ましだけでは、
ペアの構造は一切変わらない。

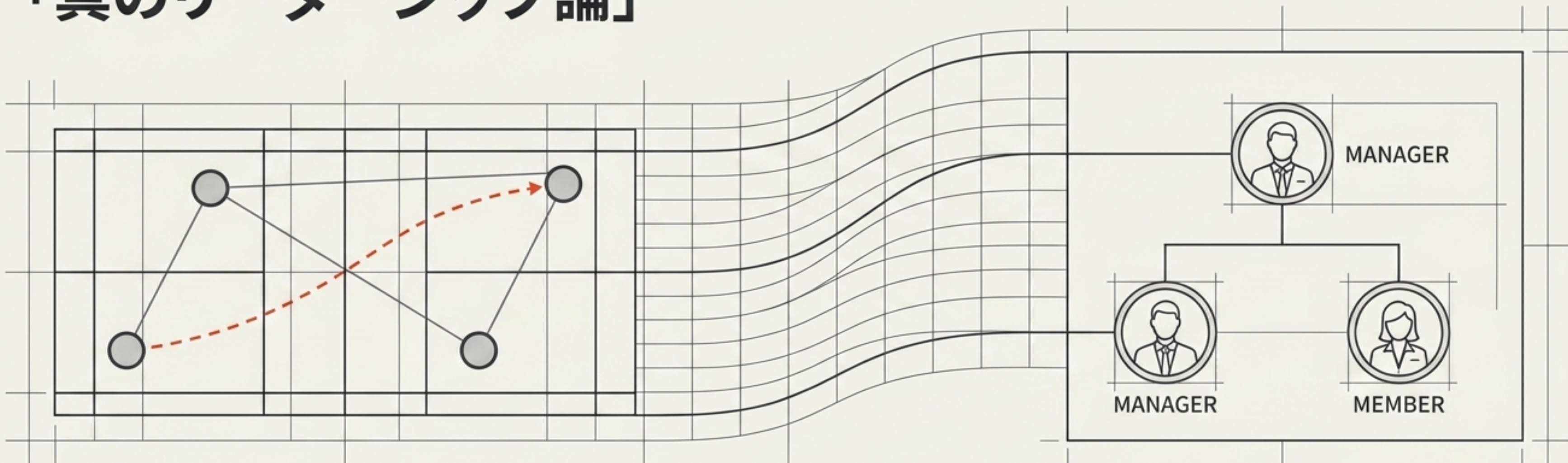
必要なのは、相手の状態を具体的に変える技術。

「今のは立ち位置が少し深かっただけ」

➔ 単なる励ましではなく、相手の次の行動を設計し、
明確な指示を与えるツールである。



AIが見抜いた、あらゆる組織に通じる「真のリーダーシップ論」



システム開発やプロジェクトマネジメントでも全く同じ構造が発生する。

優秀なチーム: 個人の力技で、仕様やコミュニケーションの「粗さ」をカバーし、成立させてしまう。

経験の浅いチーム: 属人的な「暗黙の了解」が即座に崩壊し、設計の欠陥が露呈する。

構造崩壊時の選択： 三流は嘆き、一流は再構築する



[三流の反応 - 破滅の道]

「なぜできないんだ」と嘆き、相手を責める(他責)。
因果を見ていない。



[一流の反応 - 成長の道]

「自分の指示出し(設計)に欠陥があった」と気づき、
誰もが迷わず動ける構造を再構築する(自責・設計)。



「自分の選択が、相手の次の状態をどう変えるのか」
—この圧倒的な他者への想像力と因果の洞察こそが、人を成長させる。

**「強い相方は自分の欠陥を隠し、
弱い相方は自分の設計力を暴く。」**

自分より弱い存在は、足手まといではない。
あなたの未熟な設計力を照らし出し、次のステージへ引き上げてくれる「最高の教材」である。
さあ、他責の念を捨て、自らの手で勝利の構造を設計しよう。